

室内楽 おもしろ講座

「これからは地味な音楽”室内楽”も楽しく聴ける」

第6回 室内楽 各論 その5(現代)

本シリーズも いよいよ最後の「近・現代 室内楽」となります。

長い間 お付き合いいただきましたが、取りあえず 下記作品をもってこのシリーズも終了いたします。

最初の3つは映像ですが、最後の「ホワイトマン・スリープス」のみは映像がないので音のみによる再生となります。ご了承下さい。

演奏曲目(予定)

1. ベラ・バルトーク(1881-1945) 「2台のピアノと打楽器のためのソナタ」(1937)

現代室内音楽の出発点となったバルトーク最高傑作の一つ。楽器の構成は、2台のピアノ、ティンパニー(3) 木琴、2種の小太鼓、2種のシンバル、大太鼓、トライアングル、タムタムの9種類の打楽器を通常二人の奏者が分担して演奏する。

第一楽章 序奏つきはかなり自由なソナタ形式。ティンパニーのピアノニッシモで始まり、ピアノがユニゾンで歌う。テンポは早まり、打楽器が次々加わってリズムも複雑化する。

第二楽章 アンダンテ。三部形式。打楽器がピアノニッシモで先行し、そのリズムにのって単純なメロディが現れる。次第にピアノと打楽器が掛け合いながらグロテスクな音の響宴となる。民族的色彩が濃厚に反映される。

第三楽章 ロンド的なソナタ形式。早いピアノによるパッセージが、木琴と掛け合いながら始まる。斬新なアイデアが絡み合いながら展開して フィナーレとなる。

演奏 : ゲオルグ・ショルティ&マレイ・ペライア(ピアノ)

エヴェリン・グレニー&デイヴィッド・コークヒル ((打楽器) (1987録画)

(24:30)

2. ヤニス・クセナキス(1922-) 「テトラス」(1983)

クセナキスはギリシャ生まれの作曲家だが、数学者でもあり建築設計者でもある。本曲はコンピューターが創造した極めて暴力的電子音楽と皮肉られたこともあり。短い曲だが、天下の難曲といわれ現代音楽の専門家集団、アルディッティ四重奏団以外では無理だろうとされたが、ここでは若いジャック四重奏団が演奏している。(参考までにアルディッティ四重奏団による演奏も用意)(2009録画)

(13:41)

ジャック四重奏団は、2008年アメリカで設立された前衛弦楽四重奏団。メンバーは、ジョン・リチャーズのJ、アリ・ステイスフェルドのA、クリスファー・オットーのC、ケヴィン・マクファーランドのKの頭文字をとってJACK、ジャック四重奏団と命名された。現在、アルディッティ、クロノス四重奏団を継承できる最も有望な前衛四重奏団の一つといわれている。

3. ジョージ・クラム(1929-) 「ブラック・エンジェルズ」(1970)

20世紀後半に勃発のヴェトナム戦争が契機となって生まれた作品。「地獄の黙示録」的
神と悪魔の対決。クロノス四重奏団(1999録画)
(18:20)

クロノス四重奏団は、クラムの「ブラック・エンジェルズ」に触発されたリーダーのD・ハリントンによって1973年 米シアトルで設立された現代音楽のスペシャリスト。現在もメンバーを入れ替えながら、活発な 活動を続けている。

4. ケビン・ヴォランズ(1949-) 「ホワイトマン・スリープス」(白人はねている)(1985)

クロノス四重奏団 (1987録音)
(3:40)

作曲のヴォランズは南アフリカ出身の現代作曲家。

不気味な人間の心臓音の如き単調極まりない連続音によるミリマリズム音楽。

クロノス四重奏団への献呈作品で、1987年日本レコード・アカデミー賞受賞作。

最後に改めて簡単な室内楽全般のまとめを致したく。

どうか 最後までおつきあい頂ければ幸甚です。

PS 時間的に余裕があれば、プログレッシヴ・ロック「クリムゾン・キングの宮殿」に触発され演奏・録音されたアルバム「21世紀の精神正常者たち」から モルゴーア四重奏団の演奏を聴いていただきます。

